

特集 「鳥居龍蔵と城山貝塚調査」にあたって

石尾和仁

はじめに

徳島市中心部に位置する独立丘陵である城山は、藩政時代に藩主蜂須賀家が居城を構えていたことで知られるが、その山塊に貝塚の所在が周知されたのは1922（大正11）年4月のことである。その城山貝塚の発掘調査を主導したのが鳥居龍蔵であるが、この調査では縄文時代の居住跡が発見され、貝類や人骨・獣骨のほか、縄文土器・弥生土器などが出土した。そして、徳島県内ではこの調査が契機となって郷土史家らによるその後の学術的な調査につながっていったのである。そのような意味から、徳島県考古学史にとっても1つの画期となる発掘調査であり、その学史的意義は大きなものがある。

城山貝塚調査に関わる資料としては、出土した遺物が東京大学総合研究博物館に所蔵されているほか（一部は当館が借用し常設展示室で展示中）、調査に参加した井上達三・前田正一・笠井新也ら地元研究者が書き残したメモ類、ならびに調査時に撮影された写真、拓本、当時の新聞報道の記事などがある。

今回の特集では、紙幅の都合から当館が所蔵する城山貝塚調査に関連する資料のうち、調査時に撮影された写真や井上達三が調査に関わって記した所感記などを紹介する。城山貝塚調査に関わる館蔵資料がほかにもあることから、次号以下で順次紹介していきたい。

城山貝塚調査の行程

先史時代の日本民族研究に深い関心を寄せていた鳥居龍蔵は、徳島でも先史時代遺跡の調査をおこなうため、大正11（1922）年3月末に徳島に帰郷し、県内各地を調査した。そして、城山の裾野から貝が出土するという情報を得て当地の調査に着手、来日したイギリス皇太子の案内のため、いったん東京に戻った後、4月19日に再度帰郷して城山貝塚調査を継続した。まず始めに、その行程を当時の新聞報道や調査に帯同した地元研究者の記録、及び新聞報道を整理された鳥居喬氏の成果に依拠して主なものを摘記しておこう。

- 3月27日 小松島港着の船で徳島に帰県 [徳島毎日新聞]
- 30日 美馬郡・三好郡調査、穴吹から汽車で小松島の中田に行き、千代松原の東八幡神社裏の貝塚を調査 [徳島毎日新聞]
- 4月1日 板野郡池谷から板東町の塚穴・貝塚を調査 [徳島毎日新聞]
- 2日 眉山南麓の貝塚調査、午後は新町小学校で「有史以前の阿波」と題して講演 [徳島毎日新聞]
- 3日 国瑞彦神社社務所で講演、午後は城山貝塚を調査し第1貝塚を発見、この時の調査一行は、鳥居龍蔵のほか、井上達三・前田正一・森敬介・田所市太・市川敏雄・笠井新也 [前田1955・笠井2010・湯浅2010]
- 4日 第2貝塚・第3貝塚発見、帰京 [前田1955]
- 19日 再度徳島に来着 [笠井2010]
- 25日 喜田貞吉が発掘現場を見学 [湯浅2010]
- 26日 徳島高等女学校で「未開人の文化」と題して聯合婦人会主催の講演会 [徳島毎日新聞]
- 27日 徳島師範学校で講演 [徳島日日新報]

- 30日 小金井良精が来徳 [笠井2010]
5月2日 モラエスが発掘現場見学, 夜, 小金井良精帰京 [笠井2010・湯浅2010]
3日 徳島中学校で講演 [湯浅2010]
4日 助任の弘誓寺裏の貝塚を調査 [笠井2010]
5日 夜の船便で帰京 [笠井2010]

以上が鳥居龍蔵の行程であるが, 城山貝塚の調査は井上達三・前田正一・森敬介ら地元研究者によってその後も継続されて, 調査の終了そのものは5月20日であった。

調査終了後も森敬介らによって貝塚の保存に関する提言が出されており(「徳島公園古代遺跡整理案(草稿)」などが徳島県立図書館で所蔵), 県民の間でも高い関心があったことが知られる。

城山貝塚調査の概要

次に, 城山貝塚の調査で明らかになった点を, 笠井新也や鳥居龍蔵の著作から摘記しておこう [笠井1922・鳥居1923]。

① 1号貝塚

城山の東南隅にある第三貝塚から西に約30メートルのところにある岩陰にある。ハマグリ・アサリ・カキ・ハイガイを主とする貝層で, 他にシオフキ・アカニシ・ヘナタリなども発見された。縄文時代後期中葉の土器片が多く発見された。

② 2号貝塚

城山の東南隅にある第三貝塚から北に約60メートルのところにある岩陰にある。斜面を数メートル上がったところにある。表土下15~30センチメートルで貝層に達し, そこからハマグリ・カキ・ハイガイなどの貝類や獣骨片・鳥骨・魚骨が発見された。人骨片や縄文時代後期中葉の縄文土器も出土した。埋葬人骨は2体が並んでおり, そのうち1体はほぼ完全な状態であった。幼児のものである。石を枕にして腹に石を抱かせた屈葬であった。また手の付近には貝輪が出土した。その他にもう1体発見されている。

③ 3号貝塚

城山の東南隅にある。奥行き6メートル余りの洞窟内で, ところによっては1メートル近く掘り下げて貝層に行きついた。ハマグリ・カキ・ハイガイ・アサリ・シオフキ・アカニシ・バイ・カガミガイなどの貝類のほか, サヌカイト片も出土した。土器は縄文時代後期末から晩期のもので, 弥生土器も洞窟の前庭部から壺の完形品が発見された。

④ 4号遺跡

貝層を形成しておらず, 縄文土器・弥生土器や土師器片が出土したが, 詳細は不明である。

⑤ 5号貝塚

北側の頂上部にあった貝塚で, 現在は正確な場所が特定できない状況にある。ハマグリが最も多く, アサリ・シオフキ・カキ・サザエ・シジミなどの貝類のほか, 弥生土器や土師器が出土した。

鳥居龍蔵自身, 城山貝塚調査については「徳島城山の岩窟と貝塚」を書き残しているのみである [鳥居1923]。この論稿では城山の現況を紹介した後に岩窟(3号貝塚)と人骨貝塚(2号貝塚)の発掘状況を記述している。そして, 出土した縄文土器を「立派なアイヌ土器で, しかも大森, 西ヶ原な

どから出て来るものと同じ種類の薄手式土器」と説明し、各地で出土している「薄手式土器」と同様、海岸部に位置する城山貝塚とそれらの共通性を指摘している。

城山貝塚調査をめぐる徳島の人々

城山貝塚調査を支援したのが、先述したように井上達三や森敬介、笠井新也ら徳島県内の在野の研究者であった。殊に井上達三は、明治21（1888）年に坪井正五郎が来徳したのを契機に鳥居龍蔵が設立した「徳島人類学材料取調仲間」のメンバーになっており、明治44年から翌春にかけておこなわれた第1回朝鮮半島調査ではカメラマンとして同行した人物である。明治43年から大正14年まで徳島市議会議員を務めており、城山調査時には市会議員であった。新町橋南詰で写真館を営んでいたが、後年、徳島港の繁栄を企図して繁栄組汽船部を設立した（達三の死後、共同汽船に吸収合併）。

一方、笠井新也は、鳥居龍蔵の見解に否定的な意見を持っていた。「徳島県史蹟名勝天然記念物調査會委員」として県から出張を命じられていた笠井新也は、鳥居龍蔵がドルメンとする巨石を「予はどうしても之を以て人工的なものとは見るを得ないのを悲しむ」と記したり、岩窟内部にある平石を鳥居が食物を調理した台石であるとしたのに対し、「予は人夫を指揮して石の表面をよく縄麻で洗ってみたが、人為的摩滅の痕跡は見ることを得なかった」とも記している。そして、最後に「博士は城山貝塚を破壊した。調査報告を出して之を紙上に保存するのは学者の義務である。鳥居先生もその責任を果たさずして死したのは遺憾である」と批判している〔笠井2010〕。

同じく、調査現場を見学した喜田貞吉も洞窟前の巨石をドルメンとする鳥居に対して、「この巨石がそのために作った墳墓の石だとは、自分にはちょっと受取れない。何しろここは蜂須賀三百年間の城池として、いろいろの手が加えられたに相違ないのである」と批判している〔喜田1922〕。

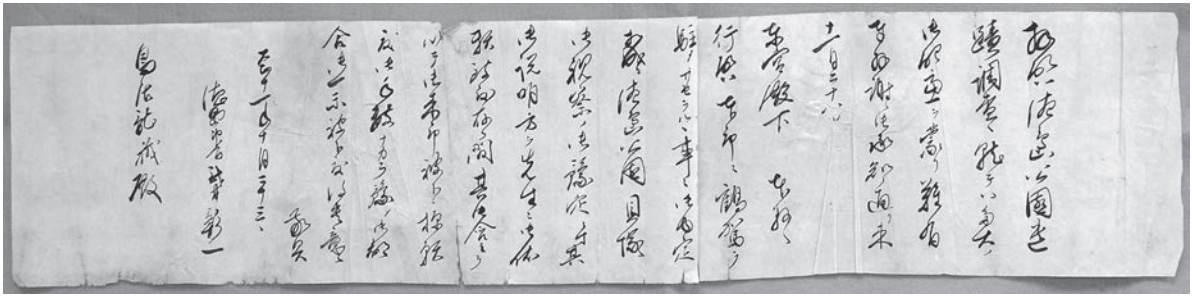
城山貝塚調査のその後

鳥居龍蔵は、5月27日に東京人類学会第361例会で「阿波の岩窟及巨石遺跡に就て」と題して報告している。

また、6月1日には梨本宮殿下が城山貝塚の見学に訪れており、『人類学雑誌』38巻6号には「梨本宮殿下徳島公園貝塚御見學」の見出しで、「特命檢閲使梨本宮守正王殿下には六月一日午後三時五分、徳島公園第一號貝塚前に御着徳島聯隊區司令部御檢閲の途次陸軍少將和田龜吉以下隨員拾貳名を随へさせらる、徳島縣内務部長永井準一郎、徳島市長武市彰及び徳島市聯合分會副長前田正一の出迎を受けさせられ徳島市長の紹介にて前田正一御先導御説明申上ぐること、なり第一號第三號第二號第四號の各遺跡の順序に實地御案内の後午後三時四十五分御發御旅館に向はせられたり」の記事が掲載されており、調査にもたずさわった前田正一が案内役を務めたことが伺われる。

さらに、11月には東宮殿下が城山貝塚を見学されることになり、鳥居龍蔵がその説明のため徳島に帰県している。まず始めに、「東宮殿下の徳島縣城山石器時代遺跡御見學」と題する『人類学雑誌』37巻12号の記事を紹介しておこう。

四國徳島市城山公園内石器時代遺跡は兼ねて十一月中東宮殿下四國諸縣行啓の際、御見學を豫定せられ徳島市長よりは該遺跡につき殿下に御説明申上ぐべきため東京帝國大學に向けて鳥居博士の出張を委嘱するところありしが博士はこれがため去る十一月二十二日徳島市に到着、小松助手亦台覽標本を帶携して翌日同市に到着し、それぞれ順備中なりしが東宮殿下には同月二十八日徳島市に行啓遊ばされ諸方面御巡行の後、城山公園遺跡に成られ岩窟を始めとしその入口に存するドルメン、原始的石棺、貝塚等の諸遺跡御巡見、鳥居博士より巨細の説明を聴取せられ尚、御駐在所たりし同公園内千秋閣に陳列する遺蹟調査發掘狀況其他の寫眞及圖畫類二十四點、發掘の諸遺物等の標本二十五點台覽、同じく鳥居博士の御説明を聴取せられたり。



鳥居龍藏宛て武市彰一市長の書簡

このように、東宮殿下の城山貝塚巡見に際して鳥居龍藏がその説明役にあたったのであるが、井上達三や前田正一・森敬介等もその行啓に対して説明役に就きたいとの希望をもっていたことが、3人連名の鳥居龍藏宛て書簡（9月23日付）からうかがうことができる（館蔵資料）。結果的には、徳島市長武市彰一から説明役の依頼は鳥居に対してのみなされたようである。その依頼のための書簡も当館の所蔵資料のなかにある（写真）。

報告書刊行にむけた顛末

先述したように、鳥居龍藏が城山貝塚調査の内容について書き記したものは「徳島城山の岩窟と貝塚」があるのみである〔鳥居1923〕。しかし、この一文とは別に正式の報告書の刊行も企図していたようである。例えば、大正12年3月刊行の『人類学雑誌』38巻3号の巻末に掲載された広告に、「近刊豫告」として、「東京帝國大學理學部人類學教室研究報告—第四編— 鳥居龍藏著 徳島城山石器時代遺跡調査報告 本文約百頁 圖版約四十葉 目下印刷中」とある。4月刊行の38巻4月号にも同様の広告が掲載されているが、5月号にはそれが忽然と消えており、第三編までの刊行図書の案内になっている。これ以降、「徳島城山石器時代遺跡調査報告」の案内が復活することもなければ、報告書自体の刊行もなかったが、刊行計画が進行していたことは確かである。また、本誌で紹介する関係写真にも印刷の指示の書き込みのあるものも散見される点も、何らかの刊行準備のあらわれかと考えられる。

近 刊 豫 告

東京帝國大學理學部
人類學教室研究報告
— 第四編 —
鳥居龍藏 著
徳島城山石器時代遺跡調査報告
本文約百頁 圖版約四十葉
目下印刷中

○ 會 員 募 集

神奈川県三浦郡三崎町所在本學部附屬臨海實驗所ニ於テ官公私立學校ノ博物學教員貳拾名ヲ募集シ來八月六日ヨリ二十日マデ十五日間海産動物學ノ實習會ヲ開ク入會志望ノ者ハ來六月廿五日迄ニ本學部ニ願出ツベシ

規則書入用ノ向ハ郵便切手貳錢ヲ添ヘ本學部ニ申出ツベシ

但入會許否ノ通知ハ六月三十日付ヲ以テ本人所屬ノ當該學校ニ發送ス

東京帝國大學理學部

4月号広告

○ 東京帝國大學理學部人類學教室出版目書

研究報告	第一編	紅頭嶼土俗調査報告	鳥居龍藏著	定價金六拾五錢
	第二編	苗族調査報告	鳥居龍藏著	定價金六圓五拾錢
	第三編	琉球荻堂貝塚	松村敬著	定價金六圓五拾錢
寫真集	第一集	臺灣紅頭嶼之部	圖版六葉	絶 版
	第二集	日本石器時代土偶之部	圖版三葉	定價金貳圓六拾錢
	第三集	埴輪土偶之部	圖版四葉	定價金六圓五拾錢
古墳横穴發見地名表	第四版	定價金壹圓五拾六錢		再 版 絶 版

所 捌 賣 區 橋 本 日 市 京 東
社 會 式 株 善 丸

5月号広告

報告書は結果的には刊行されなかったが、その理由は何であろうか。

大正13年1月に刊行された『人類学雑誌』39巻1号には次のような記事が掲載されている。

御断り 本誌は昨年八月號は印刷中を印刷所の焼失のため焼いて仕舞ひ、且、七月號は製本所からすでに當日あたり納本になる所を同じく焼失して仕舞つた。八月號の分には鳥居博士、八幡一郎氏等の論文報告があつたがこれは又他日御願ひして掲載を請ふ事とし、又七月號分は、校正刷が手許に残つたからこれを以て大體本號に充てる事とした。印刷所は業務回復の爲め昨年十一月まで休業したので、本誌も止むなく昨年中休刊する事とした。この旨は取敢へず其當時會員諸氏へそれぞれ通知状を差上げて置いた次第であつた。又、第三十八卷は第六號で終卷として打切り本號から新たに卷を改めて發行する事とした。これ等は諸般の事情御諒察の上偏に御猶恕を願ふ次第である。又印刷所の回復なほ充分ならざるため活字其他に不體裁の免れないのも御猶恕を乞ふ次第である。これ等は號を追つて改善されて行かうと思はれるし又幹事の側でも最善の努力を盡したいと思つてをります。終りに會員諸氏から本會宛、又幹事各個人宛、又、教室宛それぞれ御見舞状を下さつた方々には茲で厚く御禮申し上げます。又、罹災された方々で住所變更の向は至急本會事務所まで御通知下さい。尚休刊の會費はそれぞれ順次に繰延べる事にいたしました事を御承知願ひます。

ここにあるように、東京人類学会が依頼していた印刷所が火事に遭い、機関誌の休刊という事態に立ち至つたが、ちょうどその頃「徳島城山石器時代遺跡調査報告」の印刷も進められていたことから、何らかの影響があつたのであろうか。しかし、火事は7月のことであり、広告が途絶えたのは5月号である。

また、前田正一のメモによると、関東大震災の影響で刊行できなかつたとある（徳島県立図書館所蔵資料）。しかし、これも9月のことであり、これ以前に広告から報告書刊行の案内は消えていた。

最も可能性があるのは、濱田耕作を中心とした京都帝国大学による発掘調査報告書の刊行の与えた影響の大きさである。大正6年に刊行された第一冊『肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴』を皮切りに国内の遺跡調査報告書を計16冊出したが、これとは別に朝鮮総督府古蹟調査委員としてたずさわった朝鮮半島での発掘調査でも目を見張る成果を残したことは周知の通りである。特に大正12年に刊行した慶尚南道の金海貝塚の報告書である『金海貝塚発掘調査報告』（朝鮮総督府刊行）は、「濱田の新しい報告書の形式が示され、これに倣う報告書が大正十二年度以後つぎつぎに出版されることとなった」と評価されているように（有光1974）、報告書刊行のスタイルを確立することになった。そして、その前年に刊行していた『通論考古学』では、近時の考古学を「漸次科学的立脚地を固くし、予め斯学の目的を以て、一定の計画の下に、組織的発掘を遂行すに及んで、愈々嚴密なる意義に於ける科学的方法たるに背かざるに至れり」と概観したうえで、発掘手法や測量方法、観察記録の進め方などを細かに記述しており〔濱田1922〕、後の考古学研究の「バイブル」になったことは周知の通りである。

『通論考古学』の刊行が城山貝塚調査直後の大正11年夏、『金海貝塚発掘調査報告』の刊行が大正12年であり、まさしく鳥居が城山貝塚の報告書刊行を進めていた時期であり、何らかの影響を与えたものと想像されるのである。その濱田は、考古学的な考察から、縄文人と弥生人の間に人種的な断層がないと主張し始めていたこと、そして同様の見解が人骨分析を通して清野謙次らによって主張されていたことも鳥居にとっては何らかの影響を与えたかも知れない。

報告書刊行に向けて再考を余儀なくされる状況のなかで、翌大正13年春には東京大学を辞職する事態となった。これによって城山貝塚調査の報告書刊行は事実上立ち消えになったものと判断してよいであろう。

おわりに

昭和28（1953）年5月、前田正一宅を訪れた笠井新也は、城山貝塚の出土品について次のことを聞き取っている。

遺物の面白いものは鳥居先生が大学へ持帰られたので、今も東大人類学教室にその一部が残っていると思う。遺物の大部分は井上氏の子息井上紀貞、岩佐紀年両氏が保管していたが、戦災で焼失してしまった。[笠井2010]

ここにあるように、東京大学には城山貝塚の出土遺物が保管されており、その一部については、当館が借用し展示している。しかし、学史的に大きな意義を持つ城山貝塚調査ではあるものの、出土遺物の詳細な検討や調査に関係した人々の手記等の分析が未着手である。今後、所蔵する関係機関の協力を得ながら進めていくべき課題である。

城山貝塚は、徳島県の考古学史にとって1つの画期になったことは間違いない。今回の特集が城山貝塚研究進展の契機になることを願っている。

参考文献

- 天羽利夫 1994 「城山貝塚」『徳島城』徳島市立図書館
天羽利夫・岡山真知子 1985 「鳥居龍蔵と城山貝塚」『徳島県の遺蹟散歩』徳島市立図書館
有光教一 1974 「学史上における濱田耕作の業績」『日本考古学選集13 濱田耕作集 上巻』築地書館
阿波名勝会 1922 「鳥居博士が発見して學界を驚かした城山洞窟の貝塚」『阿波名勝』2号 阿波名勝会
阿波名勝会 1922 「遺蹟、遺物のあらまし」『阿波名勝』2号 阿波名勝会
阿波名勝会 1922 「鳥居博士の踏査」『阿波名勝』2号 阿波名勝会
飯田義資 1960 「城山の貝塚」『名東郡史』
石尾和仁 2009 「鳥居龍蔵と徳島」『史窓』39号 徳島地方史研究会
笠井新也 1922 「阿波国貝塚概説」『阿波名勝』2号 阿波名勝会
笠井新也 2010 「城山貝塚発掘記」『青藍』7号（笠井新也特集号）考古フォーラム蔵本
笠井藍水 1922 「城山洞窟の成因について」『阿波名勝』2号 阿波名勝会
喜田貞吉 1922 「徳島旧城山岩窟内の遺蹟」『民族と歴史』8巻4号
新 孝一 1983 「徳島県立図書館所蔵の森敬介氏資料—徳島市城山貝塚に関する資料」
『徳島考古』創刊号 徳島考古学研究グループ
鈴木 尚 1970 「徳島市内城山第二洞窟発掘の幼年人骨について」『鳥居記念博物館紀要』4号
徳島県立鳥居記念博物館
寺田和夫 1975 『日本の人類学』思索社
東京人類学会 1922 「鳥居博士の徳島縣洞窟遺蹟調査」『人類学雑誌』37巻5号 東京人類学会
東京人類学会 1922 「東宮殿下の徳島縣城山石器時代遺蹟御見学」『人類学雑誌』37巻12号 東京人類学会
徳島県史蹟名勝天然記念物調査会 1929 「徳島城山に於ける石器時代の遺蹟」「城山第二貝塚」
「徳島公園岩窟遺蹟（城山第三貝塚）」
『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯 徳島県
徳島市史編纂委員会 1973 「城山貝塚」『徳島市史第一巻 総説編』徳島市
鳥居 喬 2011 「新聞記事からみる鳥居龍蔵と仲間たちの足跡」『鳥居龍蔵研究』創刊号 鳥居龍蔵を語る会
鳥居龍蔵 1923 「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16巻5号
直良信夫 1925 「徳島の石器時代遺物について」『考古学雑誌』15巻11号
濱田耕作 1922 『通論考古学』大鏡閣
前田正一 1955 『阿波月あかり』阿波郷土会
湯浅利彦 2010 「「城山貝塚発掘記」解題」『青藍』7号（笠井新也特集号）考古フォーラム蔵本